
唯と最愛のH T T

田中テレフタラート・J

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

唯と最愛のHIT

【コード】

N0846BA

【作者名】

田中テレフタライト・J

【あらすじ】

平沢唯と絹旗最愛+ がひたすらトークする、トーク小説です。

(毎週日曜は必ず更新予定、その他気まぐれに更新)

第一回「レッツ、HIT！」（前書き）

新小説です。

第一回「レッツ、HTT!」

唯「どうもみなさん、平沢唯です。あけましておめでとございます!」

絹旗「新年超あけましておめでとございます。絹旗最愛です」

唯「はい、というわけで……一体私達は何をするのかな?」

絹旗「どうやら、作者の超突然新企画みたいですよ。ひたすら私と平沢さんがいろいろとトークなどするみたいです。他の作者さんに影響つけてなんかやってみたって感じみたいですな」

唯「ほえー、1月1日は家でゴロゴロするって予定だったから、突然呼ばれてビックリしてたんだ!。何はともあれよろしくね、最愛ちゃん」

絹旗「あ、はい、どうもよろしく願います」

唯「ところで最愛ちゃん、タイトルのHTTって『放課後ティータム』でいいのかな?」

絹旗「いや、『二人のトークタイム』って意味らしいですよ」

唯「なっ、なんと!そうきましたか……」

絹旗「もろ、そのまんまですね。超工夫してもんが足りません」

唯「そーかなー?私がいいと思うんだけど……」

絹旗「感覚の違いが表れましたね。それでは第一回ということですし、H T Tの仕組みについて超詳しく説明していきましょっか」

唯「うん、私のためにも是非!!」

絹旗「（本当に突然呼ばれたんですね）」

~~~~~

唯「いきます、H T T!」

絹旗「……はい?」

唯「いやあ、せっかくですし場面展開の時には掛け声でもいれてみよーかなーと思ひまして」

絹旗「なるほど、案自体は超素晴らしいですがもっとセンスのある掛け声が欲しいです」

唯「ガーン、遠回しにセンスないって言われた!」

絹旗「（あんま遠回しでもないんですけど）掛け声は後回しにして説明を始めますか」

唯「だねー」

絹旗「まずその一、何を話すかなんですが……基本的には作者によ

ってあらかじめ用意されていた話題について語ったりするみたいですね。時々、超話したいことを勝手に話したりもするみたいです」

唯「いわゆるガールズトークもするんだね」

絹旗「また、作者の報告の代弁や作者の作品の反省会も私達ができるみたいですよ」

唯「なるほどなるほど……」

絹旗「後、これは作者の夢らしいんですが、他の作者さんたちから話題をふってもらってそれについて話したり、他の作品を紹介したりもしてみたいらしいですよ」

唯「夢のまた夢だね」

絹旗「超バツサリだー！……と、また思いつき次第話すことは追加されるらしいです。わかりましたか、平沢さん？」

唯「はい」

絹旗「では続いている説明は……場所です。H T Tする場所は毎回毎回超変わるみたいです」

唯「なるほど！今回は私達軽音部の部室だけど、次回からは別の場所に変わるんだね！」

絹旗「はい。それで、場所によって特別ゲストが来たり来なかったりするらしいんです」

唯「そーなの！？じゃあ、ゲストさんも交えてトークするんだねー」

絹旗「超御明答です」

唯「……」

絹旗「……」

二人「つて、あれ？」

絹旗「……気付きましたか平沢さん」

唯「気付いちゃったよ最愛ちゃん……ズバリ、ゲスト交えちゃった  
ら『二人でトークタイム』じゃなくなっちゃっうー!!」

絹旗「ええ、私もたった今超気付きましたよ。作者のミスですね」

唯「どうするんだろ……つてあれ、メールだ？何々……『HTTの  
Hは二人+ つてことで!』だつて」

絹旗「超アバウトじゃないですか!!いいんですかそれで!?!」

唯「あ、あはは……(最愛ちゃんつてちよつとあずにゃんに似てる  
かも)」

絹旗「ふう、全く……あ、それとゲストなんですが、作者が執筆し  
ている『表と裏と窒素とビリビリ』と『K-ONノート』に登場す  
るオリキャラや原作キャラから、敵味方や時系列関係なしでやつて  
きます。また、他の原作キャラや許可がとれれば他の作者さんのオ  
リキャラもゲストとして呼びたいと超考えてます」

唯「いろんな人と会えるんだね、楽しみ」

絹旗「以上で簡単な説明を終わりますが、また何か必要なことがあったら超追加説明しようと思ってます」

唯「長い説明、ありがとう最愛ちゃん！」

~~~~~

唯「いくよ、HTT！」

絹旗「……何も進化が見られませんが……」

唯「うー……だって、何も思いつかないんだもん……」

絹旗「仕方ない……この私が超一緒に考えてあげましょう」

唯「ほんと！？やったー」

絹旗「（超子供っぽいんですが……本当に高校生ですかね？）」

唯「うーん……HTTっていうのはいれたいよね」

絹旗「確かに……英語とかどうでしょう」

唯「いいねー あっ！『レッツ、HTT』っていうのはどう？」

絹旗「あ、いいかもしれませんね、それ。とりあえずそれでいきましょー」

唯「結局私が考えたね」

絹旗「英語という案を超提供したのは私です」

唯「なるほど……じゃあ初めての共同作業だね！」

絹旗「（……新郎新婦？）」

唯「つて、あつ！もうこんな時間じゃん！帰って憂のご飯食べなきゃ！」

絹旗「私もそろそろ超チエックしてた映画を見に行かないといけない時間です。第一回はここで開きますか」

唯「そうだね、じゃあ、バイバイ最愛ちゃん」

絹旗「ええ、さようなら。あとみなさん、今年も一年よろしく願いします」

唯「よろしく願いします」

第一回「レッツ、HIT！」（後書き）

次回、いよHITスタート！

第二回 「二人の距離を縮めよう！」（前書き）

早速第二回です！

第二回 「二人の距離を縮めよう！」

唯「どもどもー、平沢唯です」

絹旗「絹旗最愛です、本日はなんと、平沢さんの家のこたつからH
TTを超お送りしたいと思います」

唯「やっぱり冬はこたつだよー……あつ、憂がみかんを用意して
くれてるから、最愛ちゃんもどうぞ」

絹旗「ありがとうございます。それでは早速みかんを食べながら超
のんびり始めましょうか」

唯「ま、待って最愛ちゃん！」

絹旗「はい？」

唯「もうちよつとだけゴロゴロしててもいい？」

絹旗「…超却下です」

唯「そ、そんな〜」

~~~~~

唯「レッシン」

絹旗「H T T！」

唯「お、最愛ちゃん！わざわざこたつからでて決めポーズとはノリノリですな」

絹旗「決めるところはしっかり決める、これが私の超ポリシーですから」

唯「かつこい、あつ、メールだ！」

絹旗「作者からメールで指示を受けるのは平沢さんの仕事みたいですね」

唯「えつと…何々？『今日はお二人の距離をググッと近づけてください。そのための準備はいろいろしております』だってさ」

絹旗「なるほど…確かにこれからやっていくためには必要なことですね」

憂「お姉ちゃん」

唯「あ、憂！」

絹旗「こちらは…？」

唯「私の妹の憂だよー」

憂「はじめまして、平沢憂です」

絹旗「はじめまして、絹旗最愛です。（なんか平沢さんより超しっ

かりしてる気がするんですけど」

唯「ところで、どうしたの憂？」

憂「あつ、そうそう 二人にこれを届けに来たんだよ」

絹旗「紙袋…？」

憂「詳しくは中を見てください。それではごゆっくり…」

唯「憂、ありがと！」

絹旗「おそらく、これが距離を縮めるためのアイテムですね…どれどれ、中を超えてみますか」

唯「あつ、これは！」

絹旗「…自己紹介カード？」

唯「もしかして、始まる前に書いてたやつじゃない？」

絹旗「超時間短縮つてやつですか…仕方ない、お互いこれを読みますか。よく考えれば、お互いまだ詳しい事情なんかも知りませんし」

唯「そーだね」

〈10分後〉

唯「…」

絹旗「…」

唯「…」

絹旗「…」

唯「…」

絹旗「ふーっ、読み終わりました。平沢さん、読み終わりましたか？」

唯「…最愛ちゃん？」

絹旗「はい」

唯「駄目だよ、女の子が暴力したら！」

絹旗「…ああ、余計なことを書いてたみたいですね」

唯「最愛ちゃん、返事は！？」

絹旗「超わかりました。あっ、そういえば平沢さんはギターが弾けるんですね」

唯「そーだよ、ギターって言うんだ」

絹旗「ギターとはギターの名前ですか？なんていうか、超平沢さんっぽいネーミングです」

唯「じゃあ、持ってくるからちょっと待っててね」

〈1分後〉

唯「持って来たよ。どうどう？カッコイイでしょ」

絹旗「なかなかいかすじゃないですか。でも、ちょっと大きいみたいですね」

唯「確かにちょっと重いかも…とにかく弾いてみるね！」

〈翼をください〉(唯)〈

唯「ジャカジャーン…っ、っ、どうだった!？」

絹旗「超甘々な歌声は置いとくとして、ギターうまいですね。よかったです」

唯「エへへ…ありがとうございます。最愛ちゃんもやってみる?」

絹旗「いえいえ、お構いなく。また時間があるときにお願いします。では、さらに紙袋をあさってみますか」

唯「っ、これは…」

絹旗「任天堂DSとぷよぷよですね…超花の女子高生と女子中学生がゲームで距離を縮めるってどうかと思っんですけど」

唯「まあとにかくやってみようよ」

絹旗「せっかくだすしね」

~~~~~

絹旗「よしっ、4連鎖」

平沢「なんの、私も4連鎖だよ！」

絹旗「やりますね、平沢さんはこういうゲーム苦手だと思ってましたよ」

平沢「憂とたまにやってるんだー。最愛ちゃんこそ今日初めてやったのにこんなにつまいてすごいよー！」

絹旗「超センスってやつで…あ、置き間違えました」

平沢「隙あり3連鎖！」

絹旗「負けた…もう一回です！」

平沢「(はまってる、あと負けず嫌いだ)」

絹旗「今度はこの黄色いっちゃいやつ選びますかね」

平沢「ずっとゲームするのもなんだし、おしゃべりしながらやるよ」

絹旗「超いいですよ、平沢さんは何話したいんですか」

唯「それだよそれっ！」

絹旗「…はい？」

唯「平沢さんってさ、なんだか距離が縮まってる呼び方じゃない気がするの」

絹旗「でも私の方が超年下ですし、一応昨日まで赤の他人でしたから」

唯「だからこそ、呼び方を変えて距離を縮めなきゃ！」

絹旗「なるほど…超言えてますね。じゃあ、希望はありますか？」

唯「えっ、えっと…」

絹旗「？」

唯「し、下の名前で呼んでほしいな…／＼／＼」

絹旗「…！あっ、うん／＼…って、超初々しいカップルですか」

唯「おお！最愛ちゃんノリいいよー！」

絹旗「急で超わかりにくいフリはやめてください、全く。それで、何がいいんですか？」

唯「どうせなら二人だけの呼び方がいいな」

絹旗「さっきの初々しいカップルの続きですか…？」

唯「え？何が？」

絹旗「素ですか…まあ、それは置いといて、何にしましょうか」

唯「…うーん。あっ！よく考えたら最愛ちゃんって素敵な名前だね！」

絹旗「…えー、呼び方考えてたんじゃなかったんですか。しかも超ストレートな褒め言葉ですよ、それ…って、いきなり5連鎖ですか！？」

平沢「へっへーん、油断してたね、私の勝ち…あ、それで呼び方なんだけど『唯』はどうか？」

絹旗「…『唯』ですか？特別な呼び方でも何でもないですし、呼び捨てになりますよ。『唯さん』はどうですか？」

唯「…『唯さん』。いいね、唯さんに決定」

絹旗「ぶよ よの決着もつきましたし、呼び方の話はここまでにしときますか」

~~~~~

絹旗「レッツ」

唯「Hチーチー！…噛んじやった…」

絹旗「しっかり決めましょうよ、そこは」

唯「エへへ、ごめんごめん。あつ、紙袋にはまだ何か残ってる？」

絹旗「どれどれ…罰ゲームカルタ？」

唯「何それ？」

絹旗「一人が札を読んで、後の二人が札をとってとれなかった方が罰ゲームってシンプルなルールみたいですね」

唯「でも、誰が読むの？」

憂「はい、私が読みます」

唯「あつ、憂！いつのまに!？」

憂「実はずっとキッチンで料理しながら二人の会話を聞いてたんだよ」

絹旗「なるほど、話が早いです。それでは超早速やりましょうか」

唯「うん！」

~~~~~

唯「レッツ」

絹旗「H T T…？違いますよね。まあとにかく超始めましょう」

憂「では、読みます。『ニ』ヤンを必ず語尾につけるべし」

唯「はいっ！」

絹旗「はやっ！」

唯「ふっふっふ、『ニ』の位置は既に把握していたのだよ。さああいにゃんよ、語尾にニヤンをつけなさい！」

絹旗「何なんですか、あいにゃんって。私は超猫キャラなんかじゃないんですよ…って姉妹そろってジト目で見ないでくださいわかりましたよ！つけます、つけねばいいんですね！…ニヤ」

唯「あいにゃんかつわい〜！」

絹旗「はあ…で、いつまで続くんですか、罰ゲーム」

唯「…」

絹旗「…いつまで続くんですか…ニヤ」

絹旗「では、唯さんが超弱っている今のうちに早く次にいきましょ
うニャ」

憂「えっ、あっ、はい！（お姉ちゃん大丈夫かな…？）『あ』いの
告白を本気でするべし」

絹旗「（私がこれ負けたら語尾にニヤンで超告白ですか！？絶対に
回避しなければ！）」

唯「（これは最愛ちゃんに仕返しするチャンス！）」

二人「（あつた！）はいつ！」

憂「これは…二人同時…？」

唯「ムムム…」

絹旗「どうします、なしにしますか？…ニャー」

憂「二人ともやるっていうのはどうかな」

唯「そうしょー！（ダメージがかいのは最愛ちゃんだもんね、憂
ナイス！）」

絹旗「くっ…（憂さん、超余計なことを…）」

唯「じゃあまずは私からだね、相手は最愛ちゃんでもいいんだよね？」

憂「うん」

唯「ではでは、ゴホン…最愛ちゃん、毎日あなたのことずっと見て
ました…大好きです！私と付き合ってください！」

絹旗「超シンプルですね。では私ですか…唯さん、ニヤニヤしながら
見ないでください…ニヤ…」

唯「エへへ、どうぞどうぞ」

絹旗「…唯さん、私、あなたに超一目惚れしました。こんな私です
けど…付き合ってくれたら…嬉しいです…ニヤ…」

唯「ぶぶっ！」

絹旗「笑いましたね笑いましたよね、人が至って真剣に罰ゲームし
てるのに超笑いやがりましたね？」

唯「だって、告白の最後にニヤ…って…可愛いすぎだよあいにゃん
…ぶぶっ」

絹旗「なっ…もう絶対に許しません、次はくすぐりなんて生温い攻
撃じゃなくてプロレス技を超お見舞いしてやります！」

唯「きゃー、ご勘弁を」

憂「あらら…二人とも鬼ごっこを始めちゃった…ぶぶっ、なんだか
楽しそう じゃあカルタはここまでですね」

~~~~~

唯「ふー、疲れた…」

絹旗「超疲れましたね」

唯「紙袋にも何にも入ってないし、今回はそろそろお開きかな。だ  
いぶ距離縮まったね、最愛ちゃん」

絹旗「そうですね、超めでたしです。あ、最後に報告です。超完全  
に更新が止まっている『表と裏と窒素とビリビリ』ですが、まだま  
だ更新まで時間がかかりそうみたいです。もうしばらくお待ちくだ  
さい」

唯「あ、そうそう、今回は初のゲストを交えたトークだよ　しかも、  
そのゲストはなんと……」

絹旗「他の作者さんのオリキャラです！それでは、また次の回で会  
いましょう」

唯「さよならー！」

第二回 「二人の距離を縮めよう！」（後書き）

次回もお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0846ba/>

---

唯と最愛のHTT

2012年1月3日00時52分発行